よばないプライベート・フィルムがある。

何組かの夫婦が、自分たちの性生活を記録したものだから、凄い迫力がある。ブルー・フィルムは何本見ても平気だが、このプライベート・フィルムのほうは、一本見ただけでガックリしてしまう。

先生はこのフィルムを、不感女性の治療補助手段として時おり用いられたようだ。効果はてきめん。女性の瞳はとろんとうるみ、なかには腰が抜けた状態になる者もあった。〝不感症高橋鐵を伏し拝み〟である。

最近、ポルノ解禁の声がたかまってきた。陰毛が写っているヌード写真もふえた。一ト昔前なら、たちまち御用の憂き目をみよう。

かつて川を飛び越えている裸女の写真が、当局の目にとまったことがある。

「……出頭したら『ここ（股間をさして）が黒くなっていますが、何でしょう』と言う。『さあ、何でしょう。陰毛かもしれないし、陰翳かもしれない』『いやインエイでは困るんですよ！』『しかし、インモウかインエイか、わからないナ』といった具合いで終り！」

（『現代の眼』昭和四十年五月号、高橋鐵「わが性探究の昭和史」より）

権力にくじけぬ先覚者の長い闘いであった。

性解放には賛成だった。しかしそれは性交乱舞を意味するものではなかった。性解放とは古めかしい性道徳からの解放であり、閉ざされていた性知識の解放を意味した。それも正しい性知識である。だから、「行動の前に知識あれ！」と叫びつづけた。メンタル抜きの性交には反対を唱えた。精神の交流を伴わない交合（コイカン）は、人間を野獣化するといって嫌った。

「伊豆哲夫氏の『性科学の先覚者・高橋鐵』に高橋銀治弁護人が東京地裁の法廷でおこなった弁論の要旨が紹介されており、高橋鐵が官権から、いかに不当な扱いを受けたかがわかるので引用してみよう。

『おめえが高橋か』という検事の暴言から高橋に対する調べが始まっております。

当時高橋被告が、病中であったことは明瞭であります。この病人をロクに調べもしないのに呼び出しては、長時間ゴザ一枚敷いた板の上に座らせておくということは、まったくの拷問であります。

その苦痛は、健康体の人が二つ三つ殴られるのとは比較にならぬのであって、その取扱いについて刑務所当局が心配していたほどであります。……

逃げも隠れもしない立場の人間であるのにかかわらず、また証拠品である文書図画〔生心レポート〕の存在は何ら争っていないにもかかわらず、まったく不必要な拘留を、しかも不必要に長くしてお

（『噂』一九七二年一月号）

「小倉清三郎（・ミチヨ）と相対会」

小倉ミチヨ

＊相対会を始む

たびたび上野精養軒で「相対の会」を催しました。会員はその頃三百人あまりで、一流の名士ばかりでありました。

「青踏社の老嬢諸君よ」と云われた雑誌「青踏」の新しい婦人達、平塚らいてう、伊藤野枝、富本一枝女史等や、辻潤、大杉栄、山村耕氏等が、よく小倉の家へ出入りしておりました。伊藤野枝さんと辻潤氏とは、子供まである夫婦でありましたが、大杉氏の元へ走ったのも、この頃から間もないことでありました。「若い燕」の名称を世に流した、平塚らいてう女史と奥村博史氏との恋愛も、同じ頃のことでありました。

「相対会」が盛んになるにつけ、警察の方がやかましくなりました。本郷駒込警察署の方がたびたび来られるようになり、ある時、全部出来上ってきたばかりの「相対」を押収され、すったもんだの末「相対」は返してもらうことになりましたが、部数が大分不足しておりますので、不足分の返還を迫ったりして、ずいぶんごたごたしました。後日聞いたことですが、駒込署で、大杉の子分のある社会主義者を取り調べているうち、係官がちょっと席をはずした間にその男が「相対報告」の一摑みを懐へ入れてきたのだそうです。駒込員が盗んだのではありませんでした。

●小倉清三郎（おぐら・せいざぶろう　一八八三～一九四一）
哲学者・性科学者。福島県須賀川生まれ。日本最初の性の研究会の主宰者。東京の国民英学会で英語を学んで、キリスト教に入信。郷里にあっては宮城中学校英語教師となったが、自己の性欲に煩悶、一九〇七年に東京帝大哲学科選科に入学する。大学では熱心にハヴェロック・エリス『性心理学研究』を研究し、一九一三年一月『小倉清三郎研究録・相対』第一集を出す。相対会の会員には各界の著名人物を擁し、一五年四月、上野精養軒に江戸時代の性具を

ます」

（梅原正紀『近代奇人伝』大陸書房一九七八）

〔大正八年〕頃小倉は、いつも色あせた木綿の黒紋付の羽織に、茶縞の小倉の袴といった身なりでありました。十七八貫もありそうな体格で近所の人などは柔道の先生とも云い、刑事だとも云いました。

先生に対する生徒といったような間柄のうちに、私はその先生と結婚したのであります。親の反対するのも聞かず結婚したのであります。結婚の話をきめた時に、小倉は私にこう申しました。「向う一ヶ年お互いに何の接触もなく愛してみようではないか。どんな現象が起るかをみるために」と。私はそれに対して、こう答えました。「この結婚は婚約といたしましょう。今後一ヶ年の間に、どんな現象が起るかをみて、婚約解消か、結婚成立かにいたしましょう」と。私はだまって考えました。三十七歳まで童貞を守り謹厳そのものと云われた小倉清三郎は、あまりにも研究にかたよりすぎていると思いました。結婚の相手を研究の対象物としているのだとも思いました。

＊押収事件

昭和八年二月、会員の杉浦非水、岡田三郎助氏等のフィルムの一件から、相対会の事件が起ったのであります。その頃私達一家は、長女メリイをフェリス女学校に入れることに決めましたので、横浜に移り住んでおりましたが、ある日警視庁検閲課警部草部一源、橋詰進等一行八名が突然私方へ来ました。

そして内からクギをさしてある玄関の戸を開けろ開けろと、どなりつけ、戸をけっていますので、「ただ今、主人は不在で私一人ですから、この次に来てください」と私が出て申しました。「うそつけッ」と云うや否や、戸を叩き破って、一同中へ入りました。

「あなた方は警視庁の方ですね」と私は聞きました。「そうだ」と答え、クツのまま上へあがろうとしますので、私は両手を拡げてみんなをさえぎり「押収に来られたならば、予審判事の令状をみせてください」とどなりました。「生意気な女だッ」とどなりつけて、撲り倒し、一同奥の方へ行きました。私が気がついて起き上り奥へ行った時には、みんなは書斎から研究資料全部を出して、自動車へ運んでいるところでした。それを見た私は世の中が滅亡するのだと思いました。しばらく茫然とたたずんでおりました。

ふと部屋の隅を見ると警部草部一源が「カードがない、カードがない」と私のテーブルの上をあちこちさがしています。

我れに返った私は、いきなり草部の元へ駈けて行き、彼を突き飛ばして、抽斗からカードを掴み出し、頸から背中へ入れました。「出せ、カードを」草部は目玉が飛び出るような顔をして、手を振り上げて私に迫りました。

「予審判事の令状があるならば、いつでも出すよ。あなたなどに大切な会員の名簿など渡してたまるものか」私はアゴをしゃくってどなりました。「裸にしてでも取るぞッ、出さないかッ」「とられるものなら取ってみなさい、私の体には指一本も触れさせないよ。結局は、お前さんなどは強盗だよ」

「チェッ畜生ッ、今にみとれ、小倉のやついつまでもぶっ込んでやるから」

草部はいまいましげに舌打ちして庭へ下り一同と一緒に立ち去りました。これが警視庁は検閲課の押収にあらずの、押収でありました。その翌日、小倉清三郎は警視庁へ連れて行かれ、三十二日留置されたのであります。その間に二三度、カードをくれ、カードがないと調べがつかない、したがって小倉を返すことができないから出してくれ、出さなければ、名前を聞かしてくれと、頼みに来ましたけれど「小倉を調べさえすればいいことで、集め、第一回大会を開いた。

「自慰」という用語の名づけ親としても知られる。小倉は、一九一九年、三十六歳で坂本ミチヨと結婚したときは童貞だった。相対会はその後迫害を受け、ミチヨは大審院に侵入して脳病院に送られたこともある。著書に哲学書『思想の爆破』等。

小倉ミチヨ

「二十二歳の春、宮城県立中学校から招聘され、英語教師として足かけ五年いたのであります。この間に性的心理学に対する研究心が起こってきたのだそうです。……熱心なクリスチャンで、宮城の教会では、牧師代理もしたそうです」

〔二十六歳の春、学校を辞して東大文学部哲学科の専科生となる。五ヶ年間、校内図書館で専門の参考書を手当たりしだい読んだ〕「学科試験の成績発表が、東大の廊下へ貼り出された時には、いつも一、二番目のところに小倉清三郎の名前がのっていたそうです。また月謝滞納者が貼り出された時にも、中頃か終わりの方に、小倉清三郎の名前がのっていたそうです」

「大正八年六月十五日に、小倉清三郎は三十七歳、私は二十六歳で結婚したのであります。

二十歳のとき、私の父は分家の甥と一緒にさすべく、勝手にきめた結婚を私に強いました。自らきめた結婚のために腹を切ってしまうなどとまでいい、私に死んでしまえとまでい

他の人には関係ありませんよ」とうそぶいて渡しませんでした。「二人か三人でも云ってくれ、吾々の仕事がならぬから」と云うので、私は天井を仰いで「伊藤半蔵」と云うと「オーヨッシ、それから住所は」と手帳を出して書きとり、私の顔を見ました。「長崎県遠賀郡直方町」と云うと「オイオイ、地方じゃないよ、東京だよ」と云ったら、他の一人が「馬鹿にするない、オレァ長崎だよ。それァ大分県じゃないかよ」と白い目でにらみました。私もこれには苦笑しました。

警視庁では、私からカードがとれなかったので、小倉清三郎を嚇かして、会員の名前を聞き取って呼び出し「今後、小倉と絶交せよ。それから相対の報告書は、君たったこれだけか。そんなことはないだろう、たった一部や二部ではないだろう」と聞いたそうである。「フーン、読み終ると、横浜の小倉の所へ返していた、フーン、みんな、どれも、これも、同じことを云うんだなー」と草部警部は頭を傾げていたそうです。事件の夜、私は東京在住の会員へ宛てて手紙を書いたのです。翌日それは速達で発送したのでした。

「今日警視庁が来ました。カードは渡しませんでしたが、もし調べるようなことがありましたら、毎月の相対報告は、横浜の小倉ミチヨに送って、保管を頼んでいると云ってください」

呼び出された会員の方々は、私の手紙を信じて、相対報告を提出されなかったことを、後で聞いて、私はうれしく思いました。

滞納の会員へ、滞納の会員へと、私は毎日のように手紙を書きました。送ってくる人もあれば、そのままの人もあり、やれやれと思うと、また元の無一文。いく度繰り返したこといました。私は悩みに悩んだ末、大病となり、死一歩前までまいりました。だんだん体がよくなってきた時、私は親を捨てて郷里を出ました。

松山市の女学校へはいり、そこで教員になる勉強をして検定試験を受け、松山在の農村の小学校に奉職しました。一ヶ年の後、上京して東京女子専門学校にはいったのであります」

（上段テキスト未収録部の一部）

「（小倉の相対会発足時の）会員は約二百人で、最盛時には五百人、廃刊間際には六十三人といわれた。会員の顔ぶれは多彩で……知名人の会員名をあげると（「青鞜」の平塚雷鳥）、岡治道（東大教授・医博）、富士川游（東大教授・医学史）、山口弥輔（東北大教授・植物学）、坪内逍遙（作家）、芥川龍之介（作家）、岡田三郎助（画家）、沢田薫（弁護士・出歯亀事件担当）、大杉栄（アナキスト）らがいる。

（梅原正紀『近代奇人伝』大陸書房一九七八）

とでしょうか。貧ほどつらいものはない、と私はいく度泣いたことでしょうか。その嵐のような生活の中にあっても夫小倉清三郎は泰然として論文を書き続けておりました。後日出版した「思想の爆破」の原稿であります。

私は毎日のように、夫小倉清三郎に急場をしのぐために、さしあたりの収入を考えてもらいたいと頼みましたが、狂人と紙一重に等しい人物には、勝つことができず、岩石に打ちつけた体のごとく、私の心はいつもキズだらけでありました。

この嵐の中に、不幸にして生れたのが三男小倉ネリヤでありました。これはわずか三十七日目の昭和十年二月十七日に亡くなったのであります。この子供の死亡六日前のことでありました。万年滞納者とも思われる、東北帝大理学部教授山口彌輔氏から、返事の手紙がまいりました。私達は喜んで封を切って読んでみました。

あに計らんや、その手紙は私を逆上させました。

「あなたの方へ送金するような余裕は私方には持っておりません。もし送金でもしようものなら家内にしかられます。小倉君はこの際友人などにすがらず、区役所の小使をしてでも、妻子を養うべきである」

私は子供を抱いたまま畳をけって、夫小倉清三郎の元へ行き、書き続けている原稿類を鷲掴みにして部屋中へちらかしました。夫清三郎は一言も発せず、再び紙を取り出して書き続けておりました。その夜から子供は熱を出し、肺炎となって亡くなったのであります。

＊警視庁を告訴する

その間にも片時も忘れえなかったのは、警視庁の彼ら八名を告訴した事件であります。

ある日、東京地方検事局の亀山検事から、小倉清三郎に出頭せよとのハガキがまいりま

「はじめてお目にかかった頃は帝大の大学院生だったように思いますが、黒木綿の汚れた紋付きの羽織を着て、見るからに鈍重な、まことに気の利かない陰性のタイプでした。話をするにも、目をつぶってゆっくり考え考え話すというふうで、じれったいほどでした」

「わたくしは小倉さんの研究に興味をもち、教えられることが少なくないのでした。性的問題の研究書としてエリスの『性の心理の研究』六巻のあることも聞きました。この中に同性恋愛の研究がありましたから、紅吉（尾竹一枝）のわたくしに対する異常な愛情、とりわけそのはげしい嫉妬に驚き、また悩まされてもいたわたくしは、紅吉を理解するうえの参考になればと思って、さっそく読む気になりました」

「（相対会の）会員はごく少数のようでしたが、作家、画家、カメラマン、新聞記者、医者その他多方面の人たちで、毎月一回会合して、自分の体験を反省して語りあい、あるいは文書にして報告したりして、それを研

したので夫清三郎は行きました。

亀山検事のいわく「君の細君はヒステリイで始末が悪いから、君に云うが、この告訴状を取り下げてくれんか。警視庁の者を訴えるとはひどかろうじゃないか」

「私の不在の時の出来事ですから、私にはどうすることもできません」

と小倉清三郎は亀山検事に断って帰ってきました。

その翌日、私は片道の運賃五十何銭かを持って東京地方検事局書記課に行き書記の一人に「昨日横浜の小倉清三郎をお呼び出しになった、亀山検事さんに取り次いでください。小倉清三郎の旅費と日当とをいただきに上りました」と私がこう云うと、書記は目をしばたたき、「それは裁判所でしょう。証人の日当なんでしょう」と云った。「いえいえ、亀山検事さんにお聞きになればお解りになります」

小頸を傾げた書記は廊下の彼方へ行き、しばらくして戻ってきました。

「日当旅費は差し上げられませんから、お帰りくださいって」

「いいえ、私はいただかなければ今日は帰りませんよ。帰りの電車賃はないんですから」

私は空のガマ口を振ってみせました。

それからすったもんだの末、ついに控訴院検事局次席検事松坂広政氏の所へ連れて行かれ、同氏の計らいで、小倉清三郎の旅費と日当として、金一円五十銭也を貰って帰ってきました。窮乏の時には一円五十銭也も尊いものであります。

（「人間探究」一九五〇年十月号）

究の資料とするのでした。

小倉さんのこの研究的態度にもいき過ぎがあったものか、奥さんが、中途で自分と結婚したのは、研究材料にするためではなかったかと悩み出し、一時はご夫妻の間がおかしくなったこともありました。……

わたくしたちは小倉さんと、裸体クラブをつくる話をよくしたものです。人間はハダカで暮らせば過剰な性的刺激がなくなるだろうなどといって、裸体生活を礼讃する小倉さんでしたが、裸体クラブの計画はついに実現しませんでした」

（平塚雷鳥『元始、女性は太陽であった』大月書店一九七一～七三）

「刺殺された山本宣治」　安田徳太郎

わたくしの十歳のときに、宣治さんの姿が急に消えてしまった。くわしい事情は知らないが、日露戦争あとのひどいデフレ政策のために、京都の商売がひじょうに、「不景気のため商売もうまくいかず、わたしらも食べるのが、むずかしくなってきた、あんたもしっかりしてほしい」と言ったそうである。そうしたら、宣治さんは「けっしてお父さんお母さんのスネはかじりません、これからひとつアメリカにわたって、モルガンのような金持になって、日本に帰って、お父さん、お母さんを楽にしてあげます」と言って、三等の船賃だけもらって、ひとりで英領カナダのヴァンクーヴァーに行ってしまった。それは明治四十年で、宣治さんが十九歳のときであった。

宣治さんの留守のあいだに、両親は商売をやめて、宇治の別荘を開放して、旅館をやった。しろうとの経営する京都式風流が、東京の作家や画家のあいだで評判になって、商売も大いに繁昌するようになった。

アメリカではキリスト数の立場から旅館業に反対した宣治さんも、帰ってみると、居心地がよかったらしく、ごんどははっきり親のスネをかじることにして、生物学者を志して、二十四歳にまたぞろ同志社中学の四年にはいり、三高、東大へと日本の学校スゴロクをやりなおした。東大動物学科を卒業したのは三十二歳で、三人の子もちであった。ちょうどその年に京都大学に動物学教室が新設されたので、宣治さんは京都に帰ってきて、自宅から京大につとめることになった。

ここからいよいよ科学者山本宣治の十年にわたる奮闘がはじまるのである。

●山本宣治（やまもと・せんじ　一八八九～一九二九）
生物学者、社会運動家。京都府宇治の料亭「花やしき」の長男として生まれる。一九〇七年渡米し、苦学のち帰国、第三高等学校を経て、二〇年に東京帝国大学動物学科を卒業した。京都帝国大学、同志社大学の講師として進化論や生物学を講じるとともに、産児制限運動や労働者教育運動に従事。
一九二五年の京都学連事件で、同志社大学を追われたのちは、実践運動に専心し、二八年の第一回普通選挙で当選した。政治的自由獲得の代議士としては、治安維持法の改悪に反対し、議会の内外で奮闘したものの、二九年三月五日、東京神田の旅館光